
編集後記

私の勤める大学のキャンパスは、仙台市の西方の青葉山という海拔100mほどの山の上にあります。仙台市営地下鉄東西線もでき、仙台駅から9分（東京駅から丁度100分）のアクセスで大変便利になりました。それでも私は、市内の自宅から数キロ程度を時々徒歩で通っています。7月の終わりには、例年、オープンキャンパスがあり、数万人規模の高校生が訪れます。数の上では日本で1位2位を争うそうです。そのオープンキャンパスを前に、工学部では毎年、教職員・学生を募り広いキャンパスの一斉清掃を行います。さらに業者に外注して、青葉山に続く道路脇の草刈りを行います。今年、その作業の様子を良く見ていましたところ、草刈り作業日より前に、草に混じって点々と生えているヤマユリやギボウシの茎に赤いテープが貼られました。後日、草刈りを行うときには、これらの赤いテープが貼られたヤマユリやギボウシは残すように注意を払っていました。赤いテープを貼ることも大変な作業です。しかし、こうした植物を残そうという努力には、とかく効率が重視される現代社会にはない、気持ちの上での「余裕」が強く感じられました。

「シリコンバレー式よい休息」（日経BP社）という本には、チャールズ・ダーウィンやアンリ・ポアンカレなど著

名な業績を残した科学者が「創造的な仕事に充てていたのは、1日4時間が限度」という主張が書かれています。創造的で生産的な人々は、余暇を持ちながらも成功できたのではなく、散歩や昼寝など余暇のお蔭で成功できたということです。人並み外れた偉業を生み出すには、「4時間という適度な労働時間」と余裕が大切なのだということです。休息の間に、「無意識」がうまく働くように、休息の内容も工夫する必要があるということでしょう。

上記の草刈りでのヤマユリやギボウシを残そうという余裕も深い関係があるように思います。研究も、我武者羅に実験を進めなければならない局面もあれば、余裕を確保し、さらに、そうした日々をコツコツと継続し、高い創造性を生み出す環境を積極的につくることが重要な時期もあります。人工知能とは異なる、人間ならではの創造性の高い人生を歩むための余裕のある社会と組織になれば、と祈念しております。

金井 浩

東北大学大学院工学研究科電子工学専攻
／医工学研究科医工学専攻

超音波医学

Japanese Journal of

Medical Ultrasonics

第44巻 第5号（通巻第301号）

© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine

—禁転載—

本体価格 2,000円＋税（本誌購読料は会費に含まれます。）

平成29年9月15日発行

編集者 公益社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩

発行者 公益社団法人日本超音波医学会 理事長 工藤 正俊

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23-1

お茶の水センタービル6階

TEL 03-6380-3711

FAX 03-5297-3744

印刷所 大村印刷株式会社